〈全体討議とまとめ〉

討議のまとめ

村越末男
（研究所事務局長）

(一)昨日からの合宿の研究会どうもおつかれさまです。実はこれはうちの研究所がはじまりまして初めての試みでございまして、90人近い方々が参加していただきまして非常にありがたく思っているわけであります。

今、昨日からの各分科会からの報告が行なわれましたが、今も司会者がいわれましたように、識字学級が小学校へ行かれなかったので、小学校の教育のくりかえしをまた支部でやった、いわゆる知識を文字という一つの技術を学びとるというのみではどうもおもしろくない。これは当然のことでありまして、何十年間かの生活体験をもった人が、小学校で学ぶようなただ文字をどう書いたらよいか、ということだけで満足できるわけはないのです。又、子ども会ももちろんそうですが、子ども会が学校の延長になっている。しかも楽しみのある学校ではなく子どもにとっていちばん苦しい場所の延長になっている面があります。そしてそれとは全然別個な、解放運動ともまったく切りはなされた、一つのテクニックに流れていっているという深刻な問題をかかえているところもあります。教育というのはやはり一人ひとりの子どもが、一人ひとりの教師とのかかわりあいというものが基本的にあるわけであるわけですけれども、この経験のみではなかなか一般化されず、同じ学校一つでもむずかしいし、全体の社会的なものでもむずかしいう点でなやんでいるわけです。

ところで、話が非常に飛躍いたしますが、きのうから18部会ございますが、行政部会が事実上二つにわかれてまして20になっているわけですけれど、きわめて多方面な部落の実態それから教育というか運動というか文学思想を含めまして、この研究所が研究し始めたということ、これは非常に大変なことだと思っています。この組織が発展し、人々がふえてまいりまして、部落のすみずみまで研究しつくす必要があるわけです。しかし向井さんがいわれましたように、部落の職業分類というもの一つをみましてもどうも今までの概念ではあてはまらないというのは事実でございます。

部落はだいたいアウト・ロウでございます。アウトカーストでもあり、アウトロウであります。法律外におかれまして、あるいはカーストの外におかれまして、差別してきた人間を、在来の法律とか文化とかいう視点だけで律してくるむというのは上からおしつけるものにしかならない。教育を含めましてこれはいえると思います。

やっぱりそこに切り捨てられた子どもたちの生活を、そのマイノリティというか、その立場から、もう一度、部落解放運動が提起ししたものを根源的に考えなおすべきであると存じます。

(二)また、今日消えていくかもしれない伝承、実は伝承は消えても差別は消えていかないわけですが、これらを、早急に部落との過去の形を含みまして根源的なものをもう一度流い直して外に問わなけりゃいけない問題、これと教育労働者なり、あるいは行政労働者なり、市民なりが結びついていくといいますか、特に昨年来からいっておる反差別共同闘争のというものは、部落差別というものの根源にあったというものが、実は他にもあったアイヌ人にもあったし朝鮮人にもあったし、女性にもあったという形、あるいはアラブ中近東の迫害された人々、植民地の人々にもあった、こうして世界の差別の問題を取りあげざるをえない。

現実にロンドンの町でむかしの植民地から移入してきた人々の差別という問題、住宅や賃金の問題、労働時間の問題、宗教の問題、教育問題、ま

ったくそこには、部落差別とかさなりあう差別というものがありました。こうした差別が世界各地にある。そういうものを、我々は単に感覚的な問題ではなしに数量的に歴史的に社会的にですね、科学的に明確にしないと実は解放運動はできない。日本の部落解放運動というのは非常にめずらしいわけでして50数年間何の先例もなしに模索してきたといっていい。そういう点ではまったくいうなれば無組織の組織、そういう少数者が模索して築きあげてきたものを、やっぱり我々が法則化することは、そういう全世界の被差別人民を解放に今日明白に貢献できると思います。アメリカの黒人解放運動にも、特にあのアメリカインディアンは今後解放運動を部落解放運動に大きく学び、共闘できる点があると思います。そういう形の我々が今求めているものは、国際的な視野にたつ、いうなれば解放路線を決定できるだけの科学的研究をする必要があります。しかしながらさきに指摘されてますように、部落解放研究所は、実は解放同盟がやってきた後を紙を食う虫みたいに細々と拾いながらようやくやっているのが現実でございます。

運動を科学的、理論的に指導していくようになっていない。これはやっぱり鈴木先生がいわれましたようにいわゆる身体障害者達に対する教育が、150人の専門的研究員のスタッフをおいて常時研究できるようになりましたら、またそうしなきゃいけないんですが、かなり実際的に変わってくると思います。

今日我々研究者の状況で最も克服しなければならない点は自由分散主義アナーキズムがもう全面にでているわけです。そういう点では、我々はやっぱり民主集中の制度を共産党に少し習わねばならない。まあ、あれだけ官僚的になったら困りますけれど、やはりそういうかなり集中的なしかもあの民族主義的な思考に落ちいらないように、国際的視野で活動しなければならない。日本の労働運動、社会運動のすべてが民族の内部から自分の組織の内部から部落の内側から視野がだんだんと狭い方向に向いている現状があります。これをもう一度外へ広げ直しまして国際的、階級的に見直さなければなりません。

(三)そして私はもう一度こういう部落の現状なり教育の現状なり文化的状況なりが、何によって規定されているかといえばやっぱり差別だと思う。差別に対する認識がやっぱり甘い現実がある。私がアリゾナ大学へ行ってまいりました時に聞いた話ですけれど、インドの留学生2人が同じ寄宿舎の同じ部屋で寝た時、二つベッドがあるわけですが、その2人が帰ったあとでわかったんですが一つのベッドは全然使ってなかった。一人はバスルームでマットを数いて寝ていたんですね。なぜか、簡単です、カーストです。法律的にはないんですよもちろん。地球の裏側へきて、アメリカの砂漠の中の大学でそういうカーストが生きてそのまま通用したという事実を聞いた時に、私は部落差別というものも同じことだと思った。いわゆるアジア的問題、アジア的な専制権力の問題が、今問題となってきているのは事実だと思う。私はそういう点では確かにアジア的な共通性というものが、日本の性格としてあると思う。そこらはもう一度将来は掘りおこしていただいたらいいと思いますけれども、そういう形でかなり大きな課題を研究所はかかえているわけです。しかし、私ははっきりとこの現在の世界というものが、明らかにもはや大きな意味での戦争は不可能なまた不可能にしなきゃいけない状況にあると思う。その中で、やはりもう一度社会主義がなぜ生まれたのか社会主義の国家とはなんなのか、社会主義とは何なのか、日本独占資本の帝国主義を含めた資本主義とは何なのかをもう一度改めて問い直していただいた上で、部落問題を考えるべきじゃないか。これが先にいいましたように民族主義に陥いりましてから国際的な視野が非常に狭まくなり、とくに社会主義の内容というものが人々の念頭からだんだん消えていっているわけです。これはやっぱりアメリカ帝国主義のイデオロギー政策が、これは日本帝国主義の政策なんだが……、そのまま我々の中の入ってきているという事実だと思います。

(四)また、やっぱり天皇制の問題は大事な問題です。なぜ天皇家に生まれなければ天皇になれないのか、しかも天皇家の中でなぜ、男系の男子でなければ天皇になれないのか。明らかに女性差別があり家としての差別がね、憲法違反の原則が日本で象徴として座っとることに対して、原理的な疑

問はほとんどだされていない。やっぱりアンタッチャブルとして抜けている。日本的性格がそこにある。

アメリカのデボスという学者が「日本の見えざる種族」(Jappan's Invisible rase)という本を書いているが、まさに見えない、だからアンタッチャブルである。こうして日本の大多数の人々は逃げていくんです。共産党も今日では部落解放同盟の綱領がまちがっているとか、あるいは部落差別などということがまちがっているのであって、あの水平社解消論のごとく勇ましく、部落解放運動を解消して早く共産党の傘下に加わりなさいということをいいだすに違いない。我々は、つまり、そういう現実無視の権力的思想を、教条主義、経験主義の階級一般論といいますが、今後はもっとスマートに解放運動に対する攻撃を展開してくるであろう。そしてさらに一般国民の一時混乱がまたおこされるにちがいない。そういうことに対する防衛の闘いとしましては、我々は明白に部落差別があるんだという認識から、現実にあるところの事実の認識からもう一度理論点検もあるいは思想点検も進めて確立して頑張らなければならないと思います。

研究所は研究機関であって政治闘争の場ではないけれど、しかし研究者が、どうもまたこれ生まれつき分散主義的傾向の強い人間が研究者になる人であるのでして、集中というのは、またこれ大変なことなのですが、これはやはり「自主的民主的」に参加していただく以外にないわけであります。そこを一つ大いに結集していただくことをお願いいたしまして、まとめにもなりませんけど、あとで原田先生にあいさついただきますから、これで終わります。